

なりきりムーブしよう
とするけど結局素が出る…

アールスミス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様転生したぜ！

千束かわええな！あの笑顔を守ったり曇らせたり色々したいわ！

あつ！記憶消してね！

で、俺にはヒロユイと風見雄二みたいな感じにしてくれ！

っていうバカな主人公が

過酷な過去を自ら背負ってクールなスペシャリストな職員を目指すけど結局のところ千束ちゃんに触れたら

クールにもなりきれずスペシャルなパワーアア！も扱いきれず戦闘力だけある足手ま

といになつてゐる話でも戦えば強い筈！

結果。キャラ崩壊して現状：リコリスの手伝ひしてます。千束専属です。

目次

原作前

命なんて安…… | 1

お前にはできない俺にはできる (家事

9

任務了解 | 17

少年の見た赤 | 24

原作開始

(朝の珈琲に) 迷える戦士たち

36

あの子、許さない! (大嘘 | 47

穏やかな日に (前触れ | 56

年上のひと (無関係 | 66

原作前

命なんて安……

「命なんて安いものだ……特に俺のはな……」

彼女の前でそう言った瞬間、ぶん殴られた……

彼女の身体能力から放たれる渾身の拳は俺の頬にクリーンヒットする。

廃ビルの中で砂埃が立ち込める。

「ヒイロ！次言ったら本気で怒るからね！」

雖揉みしながら吹き飛び倒れる俺の前に仁王立ちし、彼女は俺を見下ろす。正直なところゴッドフィンガーを頬に食らわせておいて、まだ怒ってないのかこの女は……という感情はあるが、表に出せばこれからまたネチネチと面倒臭い時間が流れると感じ謝罪の言葉を選択する。

「すまない……」

「ハイ！お説教しゅうりょー！サツサと終わらせて早く帰ってご飯たべよー!!？」

素直に即座に謝罪を述べたのが功を制したのが許しの言葉と共に手を差し伸べられる。

俺は迷わず差し伸べられた手を握り立ち上がり、身体についた砂埃を払い落としあたりを見渡す。

「敵は……残り15だな」

「そうだね！さて、ゴム弾入ってる？ヒイロのことだから抜かりはないと思うけど」

先程俺を殴り飛ばした少女、錦木千束が背後に立つ。

「問題ない……お前は前の六人をやれ、残りは俺が片付ける」

背中合わせに互いを守り合う姿勢で特別なゴム弾が装填された拳銃を構える。

「え？私が6人なの？そこは「行くぞ！」えっ？あつ！ちよつと！」

合図と共に俺と千束は駆け出す。

拳銃を構え、2発は牽制本命は3発目。

「一撃で仕留める」

弾の特性上実弾よりもズレが大きいため懐まで近づき眉間に一撃。

そのまま倒れ込んだ男を担ぎ上げ奥の2人へ投げ飛ばす。

仲間を受け止め手が塞がった敵性工作員を壁を蹴り上げ背後から2発、後頭部に撃ち込み気絶させる。

「撃て！撃て！敵は2人だ！」

3人の工作員が瞬時に伸された様を見ていた他の工作員がアサルトライフルとサブマシンガンを連射する。

「化け物か？なんであたらねえ☒」

姿勢を低くし這うように工作員の放つサブマシンガンの弾丸を避ける。

懐に飛び込み、爪先を踏みつけ下から顎を撃ち抜く。

「たかがガキ2人何戸惑ってやがる☒」

アサルトライフルが執拗に狙う中ジグザグに動き急接近する。

掌打によりアサルトライフルの銃口を上に向けそのまま2段蹴りを決め空中で後方

転回し追ってきた工作員2人へゴム弾を撃ち込む。

「外したか……」

1人には当たりもう1人には外れる。

着地時の隙を作らないようそのまま柱の裏に飛ぶ。

猛烈な弾丸の雨がじわりじわりとコンクリートの柱を削り取っていく。

このままでは埒が開かない。此方はハンドガンそして不殺のゴム弾で尚且つ、通常の弾丸より命中率は下がってる。しかし彼方は明確に此方を殺そうとしている上ハンドガンではなくアサルトライフルやサブマシンガンたとえば此方の身体能力が上だとして

も爆発的な差がなければ数で負けるのがオチだ。ならば打開策として此方も奥の手を切らざるを得ない。

「残弾数確認…Z E R Oを使う…」

マガジン内のゴム弾の数を目視し懐から注射器を取り出す。

「ッ×待って！ヒイロ!!？」

千束の静止も虚しく注射器は自身の首筋へと突き立てられ薬物が投入される。

Z E R Oと呼ばれるブーステッドドラッグは驚異的な身体能力と脳の活性化主に処理機能を強化する薬だ。

俺は幼い頃からこの薬物の耐性をつけるために投与を行なわれてきた。副作用も一時的なものだ。とりあえず強烈な吐き気、眩暈、そして自身の周りが自身にとって敵対的勢力に見える幻覚作用…これは抑え込める筈…

ドクドクと体の中に異物が入ってくる感覚

「スウーッ…ッ×グウ…」

心臓の鼓動が速くなり身体が発熱する。

強烈な頭痛と眩暈が発生し地面に片手を着く。

全身に気怠さが残る中ゆっくりと頭の中がクリアになって行き廃ビルのこの階層に

いる全ての敵の位置を把握する。

手をグーパーと開き閉じる動作を数回行うことで筋力の増強を確認し柱を延々と撃ち続ける作業員に意識を集中する。

アサルトライフルの薬莖の数、発射される弾丸の銃声に集中し10秒弱……

「今ッ！」

先ほどとは考えられないスピードで柱から飛び出し敵作業員に急接近、敵胸部に銃突き向けゼロ距離で引き金を引く。

鈍い音と共に敵は吹き飛ぶ。

「次ッ……残り2人……最速で制圧する！」

猛スピードで駆けながら持っていた拳銃を投げつける。

投げた拳銃は縦回転しそのまま残り2人のうちの1人の顔面へと当たり跳ね返る。

拳銃を空中で拾い上げそのまま飛び蹴りを放つ。

蹴りは相手の腹部に深々と突き刺さり作業員はコンクリートの壁にぶち当たり気絶する。

「残り2人ッ！」

蹴り上げた勢いを使いサマーソルトで相手へ拳銃を向け3発放つ。

側転しながら放たれる銃弾は肩、胸、足に当たり相手は体勢を崩し地面に転がる。

「最後はお前だ！」

振り向き様に拳銃を放つ。この工作員たちの練度からすれば直撃コースである。

しかし…

「避けられた☒」

どうやらリーダークラスといったところだろうか？先ほどの連中とは動きがまるで違う。

正確な射撃ほど容易く読まれていく。いや、敵は銃弾が放たれてから回避を行なっているのか？明らかに自身の銃声よりも速く動いている。

敵もすかさず応戦してくる。

敵が叫んでいるが何も聞こえない…

ついに銃弾が底をつき格闘を行うため接近する。

意外と敵は小柄なようだ。

本能が叫ぶ、コイツはここで潰さなければならぬと、脳の中でガンガンと響きわたる目の前の敵は自身にとって脅威である警告。

拳を振るい連撃を放ち相手に反撃の隙を与えない。

どうやら敵は動揺しているようだ。

私にとって敵の動揺は好機である。

一気に畳み掛ける。

とどめの一撃を放とうとした時、

「あ……れ……」

敵の姿がブレる。

捉えられないということではないのだ。確実に捉えている。目で追えている。なのに敵がダブって見える。いや正確には敵と彼女が重なって……

握りしめた拳を緩め一気に脱力する。

彼女がそのまま押し倒すように組み付く。

「もう終わりだから……みんなやつつけたから……」

「ごめん……」

「だから、さ、早く帰ろ？」

今でもあの時の見上げた彼女の顔を忘れることができない。

「ああ、帰ろう……」

2人して廃ビルの寝そべる。

「ねえ、ごはん作ってよ…先生に聞いたよ？ヒロって料理上手いんだって！」
彼女は優しい…

「ああ、家庭的なものならね…そこまで凝ったものは出せない…よ」

俺では彼女を守ることはできない…彼女を守るのは彼女だ…

俺は力を持ってしまったただの凡人なのだ…

俺は彼らにはなれない…

でも、今は彼女の優しさに甘えよう……

お前にはできない俺にはできる (家事

夢を見る。

いつもの幼い時の記憶。

首輪をつけられ時間になればその首輪から薬が投与される。

意識が朦朧とする中での訓練、長距離を走らされ極寒の地で薄手の衣服でナイフなどの格闘技の修練をする。

俺の他にも訓練するやつは沢山いた。

女も俺と同じぐらい幼い奴も、大人も…

特に俺が特別強かったわけじゃない。訓練という名目でボコられるなんてのはザラだ。それでも俺には適正があつたのだ。

俺はZEROへの適性が一番高かった。

他にZEROを投与されたやつは周りが敵に見え錯乱し暴れるところを取り押さえられ脳が溶け鼻から漏れ出し死亡していった。

中には投与した瞬間大量に分泌されたアドレナリンによりショック死するやつもいた。

コロシテコロシテコロシテコロシテコロシテ

俺は女の額に拳銃を突きつけとどめを刺した。

周りは恐怖していたんだろうか、後退り俺の進むを開ける。

何も感じない。

女の死は今となつては一つの命として理解できる。

あのときの俺は石ころ同然、30秒前まで動いていたものが動かなくなった。というぐらいにしか思わなかった。

罪も罪悪感も、ZEROのせいなのか元々の人間性なのか…

報いは受けるつもりだ。

だが今じゃない。

守れなくてもいい。守ろうとさせてほしい…

この血にまみれた両手でも必要とされるのであれば…

俺の一筋の光を失わないために…

だからすまないな、

まだお前達から鉛玉は受け取れない…

さあ、目覚めの時だ。

起床する。

枕元に置かれた拳銃をホルスターにしまい寝具を整える。

最低限の身支度をし共用キッチンへと向かう。

一欠のバターを溶かしベーコン、目玉焼きを二人分フライパンに用意し簡単にベーコンエッグを作る。

サラダは簡単にレタストマト、フレンチドレッシングは自家製だ。

これは喫茶店リコリコでも使用している。

そろそろだろう。

「おっはよー！千束起床！」

パサパサとした布のこすれる音から下着にワイシャツだけを羽織っただけの格好で

自身のセーフハウスからやってくるのがわかった。

俺は千束に目を向けることもせずキッチンへと向き合う。

「食事をするのならその格好をどうにかしろ……………」

「フヒヒ！なにいく？赤くなってるのかあ？おいこつち向いてみるよ」

「いいだろう、お前のその姿を写真にしてリコリコのsnsに乗つけてやるから待っている。もつと別の層の客を獲得できる。ほらそこに立て、「うえッ？あつ！ちよつ！待って！お願いだから待って！やめて！投稿しないで！着るから！ちゃんと着替えるから待って！」

スマートフォンを振り向きざまに構えるが彼女がギリギリで阻止する。

というより、それ俺のワイシャツ……………心頭滅却……………あつ！せや！ZERO打とう！俺のワイシャツは元に戻しておけ……………」

「へ？ナンノコトカナ…キガエテキマース」

目にも留まらぬ速さで自室に逃げ込み速攻で戻ってくる。

着替えるのはや……………

席について……………

流石日本の誇る最強エージェント

「せつ！早く食べよ！」

「ああ……今日はトーストと白飯があるが…」

「焼き立てがあるならトースト！」

「了解した」

焼き立て、炊きたて構わずトーストを選ぶと読んでいたのでトースターにはすでに二人分の食パンがセットされていた。

リコリコから拝借した小倉餡をトーストに塗って千束に渡す。

「うん！今日も美味しい！」

俺はレタスとトマト、ベーコンエッグをトーストに載せて食す。

「褒めても何も出すものはない」

彼女よりも早めに食事を終え席を立つ。

食後の珈琲と行きたいところだが、残念ながら俺の入れるコーヒーは先生が入れるコーヒーには負けるのでリコリコについてからにしている。

「食器はいつもどおり流しに置いておけ、俺は先に行く」

「あつ、ええ〜一緒に行くお〜よ〜」

俺が出発しようとする朝朝食を強引に口に含めようとする。

「二人でいることを目撃されるのはこちらに不利だ」

「え？誰に不利なの？ほら行ってみるよー、お？照れてんのかー？」

主にミズキだ…それに先生にもみられるのもあまりいいとは言えない。からかわれるのは嫌いだ。

「……………いいだろう。5分で用意しろ」

「ウシツ！ヤッター！」

両手を上げくると周り自室に鞆を取りに戻る彼女を待つ。

「あつ、待つてる間に行くんじゃね」「わかったから早くしろ」…はーい」

いつもどおりの朝、

携帯がなる。

「風見だ。なんのようだ？」

『相変わらずピリピリしてるわね。そういうところはアイツに似なかったのね…』

電話の相手はジュリア・バルデア 諜報機関所属の行動分析学の博士だそうだ。

俺の師匠の親友であり俺の保護者ということになっている。

「ようがないのなら切るぞ」

『ちよつと！まって！貴方、もうすぐ命日なの知ってるでしょ？今年も命日は二人で過ごして「わるいな…その予定はない」

俺を氣遣つてのことだろうが電話を切る。

俺はまだ乗り切れていない。そんなことでは傷口は閉じることも治ることもない。

ヤツとの決着もついていない……

ヤツをこの手で抹殺する。その日が来るまで……

「おまたせ〜！ん？顔怖いよ？」

「いや、問題ない」

「そつか、じゃあ早く行こう！これじゃあギリギリかなあ」

「お前のミスだ。二輪を出す。後ろに乗れ」

「ウヒャー！フヒヒ」

ヘルメットを担ぎ玄関をでる。

もしヤツが、

ヤツとの関係にケリをつけるのであれば……

彼女は巻き込めない………

任務了解

暖かいシャンデリアに照らされた洋館の一室。

スーツを着た貴族風の男は赤ワインをグラスに注ぎ、モニターに映された男女の写真を
を見る。

「彼は随分と人間味を取り戻してるようだね？」

「ええ、実験体ムラサメ、プロトゼロは感情を少しずつですが取り戻しているようです。
喜怒哀楽表現に苦しんでいるようですが……」

「感情の昂りによるZEROの稼働率向上……彼女の死に際は彼は立ち会ったのかい？」

「ええ、ですが貴方様からの傷の後遺症からの死です。目の前で殺害される。というよ
うな感情にシヨックを与えるような出来事ではないかと……もともと死期も悟っていた
ようですよ……引きずってはいるようですが昂りには直結しないかと思われます」

「なら、彼女に死んでもらうってのはどうかい？」

「報告にあつた錦木千束……ですか？」

「うん……正直、邪魔なんだよねえ……本来ならムラサメと引き離すくらいでいいんだけど

どうせなら殺してしまおうか…彼の覚醒には大いに役立ってもらったことだし…いいデータが取れているよ。もちろん彼の国のトップクラスエージェントである彼女を、それも彼の目の前で殺すのは至難の業大……だけどね」

男は引き出しから試験官を2本取り出す。

「ZEROには及ばないが兵士の判断力、筋力等の向上をもたらず epyon、直接脳に移植させるだけで人工知能と直結し反射能力の向上、合理的判断が可能になる DOLL、いずれも彼から生まれたものだ。これを持ってすれば彼には及ばないがその、リリース?と言ったかな?彼の国のニンジャ集団は殲滅できるんじゃないのかい?」

「まだ実戦は行っておりませんのでなんともし…」

「まあ、いずれ彼等ともことを構えることになるだろうからね。兵士による兵士のための兵士にとつてより良い世界のために……そうだね。彼にも礎になつてもらおう……」

うつとりとした目線で薬品を眺めてワインを流し込む。

「じゃあ。彼にプレゼントを贈ろう。待っていてくれ、ムラサメ……いや、今は風見緋色くんだったかな?最高の贈り物を君に用意しよう。君に希望と特大の絶望をもたらす……ね?襲撃日は彼女の命日がいね。そちらの方がやはりドラマティックじゃないかい?」

スーツの男は部下へ薬品を手渡す。

「この2本を二名の実験体に投与し2人を襲撃させろ。生死は問わん。できるなら生捕でもいい。二人の身体に興味があるからね。プロトゼロはともかくアラン機関などという団体が目をつけた少女にも興味湧いた。いい実験ができそうだ」

ニヤリと口角が上がり不気味な笑い声が室内に響き渡るのだった……

「それにしても…彼はなんでまだ生きていられるんだろうね？アレだけ漬かっているのに…」

「ヒイロ…お前、またジュリアからの電話を一方的に切ったのか？」

「問題ない「いや、こつちがあるんだよ！」……そうか…すまない」

「まったく…」

現在ピークタイムを終え喫茶店内にはミカ、緋色の二人だけしかない。

洗い物作業をしながらミカと緋色は雑談をする。

「もう時期…命日か…」

「ああ…」

緋色の手が止まる。

「まだ、アイツのことを気にしているのか？」

アイツ。師匠…緋色の思考は巡らせる。

育ての親であり姉であり母である。

感情を戻すきっかけをくれた女。

そして緋色に戦闘技術の全てを叩き込んだ女。

緋色の中で彼女の死に際が何度も繰り返される。

最後の言葉も…

「もう、いいんじゃないのか？」

ミカが少し休憩にしようとコーヒーを差し出す。

緋色は渡されたカップをとり壁に寄りかかる。

「いや、まだ終わっていない。今でもアイツの死に際を鮮明に思い出すたびにヤツの薄笑いが脳裏に浮かぶ。ヤツをこの手で倒すまで…俺は止まらない。いや許されない…」

手に力が入りカップが軋む。

「割れたら弁償な…千束には話したのか？」

金銭には敏感なのかカップにかかる負荷がスツと抜ける。

「フツ…ヤツとの関係か？未だに死んだ女のことを引きずってることか？」

「そりゃあ、全部だよ…お前が使ってるブースデッドドラッグのことはアイツ知ってる？未だにj bから取り寄せてるってのも」

「ああ、出自までは教えてないがな、最低限背中を預けるものとして俺にしか扱えないという点と戦闘でどのような結果になるのかは…教えているつもりだ」

「そういうことじゃねえよ…」

「~~××~~」

ハアとミカがため息をつく。

「お前が今千束の事を一番に考えてんのは知ってるし、わかってるつもりだ。その上でアイツが今のまんまでいられるように余計なことも言わないのな。だがなあアイツも鈍くわねえ。薄々勘づいてるさ」

「そんなことは「あるよ…女つてのは怖いもんだ。こつちが巧妙に隠していてもすぐに見つけてくる」…そうか」

「いつか…話す…それに」

「それに？」

コーヒーカップを起く。

「俺はわからない…どうすればいいか…どんなにZEROを使い脳をクリアにして処理してもこの問い答えは導けられない」

「まあ、一人で抱えるよりはいいんじゃないか？アイツに秘密で何かおっ始めようとしていたなら確実に拗ねると思うぞ…アイツは自分自身で言ってるからな、やりたいこと最優先…だったか？だったら巻き込まないで、まあ覚悟が必要だがな…」

「拗ねられるのは勘弁願いたいな…考えておく…」

「まあ、悩めるようになったのは成長だな。昔のお前は殺すか生かすかって瞬時に二極を選択してたからな。こうして苦悩するのも若者の特権だ」

「若者の特権…」

緋色はミカの言葉を噛み締めるように復唱する。

「だがな、自分に対しては悩むなよ」

後悔するぞと念を押してミカは緋色の肩を叩く。

「さて夕方に備えて、アイツらも帰ってくる頃だろう。これは男同士の会話ということにしといてやる…」

ミカはどこかに目配せして厨房奥に去っていく。

店内に一人となった緋色の携帯が鳴り響く
非通知

『風見緋色、任務だ。詳細は追って連絡する』

この連絡と共に店内から彼の姿が消えたのだった。

少年の見た赤

『任務を説明する。今回の任務は先日不法入国を確認したテロリストグループの殲滅だ。リストをそちらに送る』

手元の端末にはテロリスト構成員の顔写真付きのリストが添付されていた。

『君にはこのテロリストグループを消してもらいたい。もちろん全員死亡だ。生かす理由がないのでな。任務に当たる上でこの2名には注意してもらいたい』

端末のリストには2名の男女が映っていた。

『その二人を知っているな?』

端末に映る二人の写真に微かに幼少の記憶が蘇る。

「コイツらは…」

『お前の兄弟つてところだ。同じ実験体達…気を抜くな。こちらがやられるぞ。これより任務概要を伝える。貴官はこれより敵拠点に潜入し敵の殲滅可能であるなら写真の2名のサンプルを奪取。証拠の隠滅にかかれこれは我々日米合同軍事作戦としている。我が国のDAには既に根回し済みだ。余計な情報は流すな』

「任務了解、作戦を開始する。通信終了」

通信機を破壊した瞬間に緋色は駆け出す。

袖から二丁のデザートイーグルが取り出される。

直前に見た拠点の図面を思い出す。

5フロアのうち3フロアが敵の拠点となっている。

移動手段はエレベーター、もしくは非常用階段しかない。

緋色は迷わず非常用階段でテロリスト工作員のいる三階フロアまで駆け上がる。

非常用ドアを開けフラッシュバンを投げ入れる。

「なんだ?! 敵襲?」

慌てふためくテロリストたちを容赦なくデザートイーグルの銃弾が貫通する。

緋色は引き金を引きながら射線を横にずらす。

連射される高威力の弾丸はコンクリートと砕きながら混乱する多くのテロリストの

眉間に吸い込まれていく。

崩れさるテロリストを見渡し制圧を確認した緋色はさらに上の階を目指す。

階段を駆け上がり先程の下の階の異変を察知したテロリストが下の階に降りてくる。

テロリストが銃口を緋色に向ける。

ワンツールの要領で左右に飛び一気に距離を詰め顎に掌打、がら空きになった胸に銃口

を突きつけ引き金を引く。

だらりと下がったテロリストを立てにしながら一気に駆け上がる。

4階に上がり死体を蹴り飛ばし左右から挟み撃ちにしようとするテロリストに銃口を向け一撃で仕留めていく。

すでに4階のフロアは5階のテロリストたちもいた。

駆け出すヒイロ。

姿勢を低くし向かうテロリストの脚を払う。そのまま前と後ろに一撃。

二丁という利点を活かし効率的に作業的にテロリストたちを処理していく。

右に、左に、前に後ろ。

一定のリズムで放たれる銃声。

テロリストは皆一撃で仕留められている。

そこに慈悲はなかった。

緋色は止まらず奥へと進む。

そこには二人の男女がテーブルに腰を掛けていた。

パチパチと乾いた拍手とともに二人は立ち上がる。

「全然足止めにならなかったね？ トウ？」

「そうだね。スリイ」

「お前たちが今回の首謀者か？」

双子のようなやり取りをする。男女に緋色は問いかける。

「ピンポーン！ 半分正解で！」

「ブツブツ！ 半分不正解！」

返答に苛つきを覚える緋色は二人に銃口をむける。

「まあまあ」

「そう、焦らないでさー！」

二人は視界から一瞬で消え緋色の耳元でささやく。

緋色は咄嗟に後ろに飛び距離を取る。

「アハハ！」

「驚いた？」

「驚いたよね？」

確かに緋色が敵を見失うということは未だかつてない。自身が体験したことのない事象が起き緋色は焦り、そして動揺する。

「そりゃあ不意に動けば」

「君の視線から」

「僕たちなら」

「「消えることは簡単だよね」

「それで、さっきの答えだったっけ？」

二人は口元に手を当て考える仕草を行う。

「話す？」

「話そう」

「じゃあ！」

「教えてあげる！」

「僕たちの」

「パ。パ！」

「ヒース・クシュリナーダ！」

ヒース・クシュリナーダ、その名を聞いた緋色にさらなる衝撃が走る。

「あの男はまだこんな事続けているのか……」

緋色にとっては仇であり自身をエージェントに仕立て上げたと言っている存在。

「あの男はどこにいる？」

「それ教えると思う？」

「思う？」

「なら力尽くで聞き出すまでだ！」

緋色は引き金を引く

初弾を避けられそのままもつれ合い格闘戦に移行する。

互いに掌打で拳銃を弾き飛ばす。

背後からスリイと呼ばれた男のほうナイフを持ちそのまま刺してくる。

トウを殴り飛ばし後退させ、背後のスリイを蹴り飛ばす。

スリイは吹き飛び背後のダンボールの山に突っ込む。

「トウ、やつぱりゼロは強いよ」

「スリイ、このままじゃ勝てないね」

「じゃあ、使おうつか！」

「使おう使おう！」

二人は懐から注射器を取り出す。

ステロイド系かたまたまブーストドラッグの一種か。

緋色は警戒する。

二人は同時に注射器を首筋に挿入し、薬物を接種する。

「グウ……アツ……熱いよスリイ」

「ハアハア、熱いねトウ」

胸を抑え息が荒くなる。

口角が上がりちらりと見えるその眼光はまさに狩りをする獣の目のようにギラついていた。

「でも、これで」

「君を」

「殺せる！」

二人が消える。

瞬間に緋色は吹き飛ばされていた。

「ツ…何が起きた…」

壁に持たれるように立ち上がりあたりを見回す。

高速で動く2つの影、最低限の攻撃はまだ見切れるため腕でガードの姿勢を作る。

「グウツ！」

裾をナイフで切りつけられる。

「アハハハハアハハハ楽しいねえトウ」

「楽しいねえ！スリイ！」

急所への攻撃を往なすが次々とナイフでの切り傷が増えていく。

「奴らの反応スピードが格段に上がった…あの薬品の影響か?!」

緋色は捨てられた注射器に目をやる。

「冷静に分析する、余裕が！あるのかなっ！」

「チイツ！」

大振りの斬りつけを後ろに飛び回避する。

「もーらい！」

背後に回ったトウの回し蹴りを諸に喰らう。

「ガハッ！」

肺の空気が一気に抜け地面に倒れ伏す。

「え？もう終わり?！」

「ウツソー！トウ終わりみたいよ！じゃあ止めだね。バイバイ」

「待ってスリイパパが連れて帰れってさ！」

「うーん。殺せないのか…でも！またパパに褒めてもらえるね」

「やったねやったね！あーでもね。もうひとり捕まえなきゃならないんだって」

トウがタブレットを操作する。

「えーやだよゼロ捕まえたからいいじゃんいいじゃん」

「なんでも忍者らしいよ！」

「ニンジャ!?ニンジャ！ニンジャ！」

「んーんとなんて読むのスリイこれ？にしきき？せんぞく？」

「あーそれね！ちさとつて読むんだよ！」

千束の名に緋色がピクリと動く。

「まあ、殺してもバレないかなあゝアハッハ」

「殺しちゃだめだよ。彼女を連れて変えればゼロは言うこと聞くってパパ言ってたよ」

甘いなど緋色は会話に夢中の二人に気づかれないように立ち上がる。

「アレ？まだやる気なの？」

トウが緋色に目を向ける。

「そんなにボロボロじゃあん…やれんの？」

「まだ、これを使ってないからな」

取り出されたのはZERO。

首筋へ迷わず挿入する。

ドクドクドクドクとくすりが流れ込み血が沸騰するように熱くなる。

身体中が発熱し緋色の目もまたギラギラと獲物に飢えた目になる。

「あーあ、そんなに血を流してんの…パパには悪いけど殺しちゃおう」

「そうだねそうだね！じゃあ行つ……………」

ぐざりと突き刺さったナイフによりトウは何も言わず絶命した。

「ベラベラ喋りすぎなんだよ。オマエ。千束に手は出させねえよ」

ぐしやりと崩れ去るトウの死体を尻目に出口へ向かう。

「グツ…流石に血を流しすぎた…」

意識が薄れる。

階段を踏み外し倒れようとする緋色を赤いナニカが受け止める。

「ヒイロ……心配かけ過ぎだよ………ほんつと………」

すでに緋色の意識は落ちておりこの言葉は届くことがなかった。

原作開始

(朝の珈琲に) 迷える戦士たち

あれからだいぶ感情を表現できるようになった……

思い返せばかなり時間が経ったと思う。

正直感情の希薄な原因はZEROの使用なのではないかとも考えていた。

確かに使った瞬間は昂りを感じることもできたが効果が切れた途端何も感じなくなる。一時的な要因というやつなのかもしれない。

あれからナンバーズも襲ってこないし、通常時で苦戦することはほぼない。ZEROを使う場面がないのだ。

パートナーとも連携がとれている。zeroに頼らない戦いができていると感じる。我ながら成長と回復が早いと思う。

「そろそろ朝だよ……起きて」

千束の声が寝室に響く。

俺も気の抜けた生活が遅れるようになったものだ……

数年前までは寢室に他人を師匠以外の人間を入れるなど絶対になかったことだ。

「ああ、すまない。先に起きていたか」

「ううん、私が早起きしただけ」

彼女は師匠に似ている。

俺の世界に色彩を与えてくれたことに感謝しかない。

「今、珈琲を淹れる。待ってろ」

先生に教えてもらった通りミルを使い豆を挽く。

前に教わったがお湯は何度かに分けて淹れるのがコツだそうだ。

サーバーにコーヒーがポツポツと溜まっていく。

都内では始発が動き出す時間。

街にはポツポツと人が増え始める。

俺はこの時間帯が好きだ。

悠久に続く平和のように思えるこの静寂。

「最近はどうなされなくなつた?」

窓から外を眺める千束が振り向きざまに問いかける。

しばらくZEROの使用を控えてきた為か……確かに、最近悪夢を見ることはない。

「ああ、ないな」

「まあそうだよね、久しぶりにあんな寝顔みたかも！」

「どうやらそこそこな時間千束は俺の部屋にいたらしい。」

「写真に収めているのであれば消しておけよ。中原には渡すな。SNSにも流すなよ」

「ミズキには渡さないし、アップなんてのは絶対ないヨ、これは私が集めてるだけ」

人の寝顔を写真に集める趣味とは…

千束がドカッとソファーに腰掛けテレビをつける。

ニュースでは電波塔の事件から10年、既に延空木も完成間近と報じられていた。

「もうだいたい経つのか……………」

「そうだね……………それでも今は天気もいいし私も健康！今日も日本は平和です！それでいいんじゃない？」

ニカッと微笑む彼女に淹れたてのコーヒーの入ったカップを渡す。

熱々のまま千束はコーヒーを口に運ぶ。

「おおおつ！美味くなつたねー」

「何年やつてると思ってる。それに豆もいいヤツだ」

「それでもだよー私が褒めてるんだからさー！少しは照れたりしなつて！ねーねー！顔赤いんじゃない!?……………そうでもないか…まあその反応は昔から変わらないよ

ねー」

何をいうか、この女と相對すると内心平常心を保つので精一杯なのだ。

それに顔は表情筋が力んでいるだけだ…感情のままに生きることにしているはかなり成長したはずだ…そう心の中で愚痴る。

二人がコーヒーを飲み一息ついていると、

テーブルにおいてあるスマートフォンがなり始める。

「風見です。おはようございます。何がありましたか？先生」

『ああ早朝にすまないな。問題発生だ。千束はいるか？』

先生からの電話に俺は千束に目をやる。

その目線を見て千束はまたかと、気だるそうな反応を見せる。

「ええ、まだセーフハウスで待機しています。変わりますか？」

『いや、一緒に聞いてくれ。今回は二人一緒に稼働してもらおう』

二人一緒に…相当な案件でのトラブルということか…それとも…

「了解しました。詳細の説明を頼みます」

スマートフォン通話をスピーカーモードに変更する。

もちろん通話をスピーカーにしても徹底した防音のため部屋外には漏れることはない。

『簡単に説明すると人質奪還と犯行グループの無力化制圧、生きたまま全員捕らえろだ』
やることが多いな。

生きたまま全員か……

「それにしても人質ですか……」

『ああ、その人質なのだが……』

先生の言葉が詰まる。

「なにか人質に問題でも？」

『人質はリコリスだ』

なるほど、大方任務に失敗し身柄を拘束され俺達が尻拭いということか……

それにしても犯行グループを生きたまま捕らえろ……か……

何にしても裏がありそうだ。

それに訓練されたりリコリスだ。そう簡単に敵に捕まるミスを侵すとも思えない。

「罠……という可能性は？」

『現在、主力チームが先行しているそうだ。DA絡みのつてのはなさそうだが……何にせ

よ上はどうしても敵の情報がほしいそうだ』

だそうだ……

千束も仕方ないというジエスチャーを取る。

「了解、現地へ向かう」

ヘルメットを取りバイクのキーを取る。

「千束、行くぞ」

ヘルメットを千束に投げ渡す。

「えーもうちよつとだけコーヒー飲ませてよー近いんでしょー」

「時間がない、行くぞ」

「はいッはいッはいッはいッ…あつ、あと一口っ!」

エレベーターを使わず階段を駆け下り駐車場に止めてあるバイクに跨がる。

後ろには千束を乗せる。

「つかまってる!」

「もち!」

しつかりと千束が腰に手を回し掴まることを確認すると、フル・スロットルで飛び出す。

あたりはまだ交通量が少ない。緋色はそのままどんどんギアを上げアクセルを開けていく。

まだゴーストタウンに近い街中を猛スピードで駆け抜ける疾走感が背中の感触を忘

れさせてくれた。

現地へ到着すると近くのビルには既に先生が狙撃する位置に待機していた。

バイクを適当なところに停め各自インカムを装着する。

「風見、錦両名現着」

『確認した。両名とも非常階段から6階へ向かえ』

「ろっ、六階くっ?!」

流石にビルの6階まで駆け上がるのは俺と千束どちらも可能であるがしんどい。

軽口は叩けるが……

「これ、結構キツイかも……」

嘘つけ…ケロツとした顔で言うな。

『人質と犯人グループはその壁の裏だ』

「了解」

お互いに拳銃を抜き壁に沿って窓際に向かう。

窓際からなかの状況を覗く。

しかし奥でなにか光るものを見つける。それは光に反射した大口径のマシンガンの

銃口であった。

なんの迷いもなく銃口がこちらを向き……

「マズイー！」

「えっ? きやつ?!」

千束に覆いかぶさるように伏せる。

俺たちの真上を口径の大きいマシンガンの弾丸がガラス窓を破り何発も通り過ぎていった。

撃つたのはセカンドリコリス。

状況を確認すれば犯行グループは制圧。その場で確認できるものは全員死亡。

呆気なく俺たちの任務はおじやんと言うわけだ。

「ちよっ、重いよヒイロー! 大丈夫だって」

怪我はないようだ。

ホツとする。そういった感情も久しぶりだ。少し照れてもいるのだろうか。彼女の顔に目を向けることができない。

「まあ、ありがと……」

「気にするな……」

互いに目は合わせようとしなない。

「それにしても派手にやったな」

「すごいねホント！スダダダダッて斉射！」

「どうやら人質のリコリスは無事なようだ。」

『……ハア……撤収だ。お前たちの存在は今日なかったことにしろ』

狙撃ポイントを見るとすでに先生がライフを片付けて担いでいる姿が確認できた。

「来た損だったね……」

何故か膨れっ面の千束、そんなに任務がなくなつて残念なのか……まあ確かに呼ばれただけだしな。

「そんなにドンパチがやりたかったのか」

「そおゆうことじゃないってば！」

「せっかくヒイロが淹れたのに絶対今から帰つてもコーヒーも冷めてるし！それならこ
う、活躍したほうがなあつて」

「また淹れてやる」

時間を見ればまだまだ出勤には時間があるしもう一杯程入れる時間もあるだろう。

「風見、錦木両名帰投します。帰るぞ」

千束にヘルメットを投げ渡す。

「さあ！帰ろー！」

バイクにまたがりエンジンを掛ける。

現場を振り返ればもう処理班が到着し弾丸、銃の硝煙、死体などをすべて回収処理する。

見ればもうそこで何があったのかわからない。

こうやって日本での出来事は消されていくのだ。

すべてをなかつたコトに。

これが俺たちの守り続けるイツワリの平和。

そしてこのイツワリの平和がもうすぐ、暴かれるのを俺たちは知らない。

「あつ！チョコレートあつたっけ？」

千東、締まらないから今は言わないでくれますか？

「ストックは……ない。この間お前が食べたので最後だ」

「ええーコンビニ寄ろうよ！」

駄々をこねるように後ろで揺れる。

というか危ないだろ……

「わかったから揺れるな」

まあ機嫌を直すのが先だな……

コイツ接客だし……

少しフラつきながらバイクは進んでいく。

向かうはコンビニ……

あの子、許さない！（大嘘

「ヒイロ、お前には千束とのバディを解消してもらおう」

先生から唐突に突きつけられた宣告。

頭が真っ白になる。

なぜ？

俺が何をした？

先の任務で何もできずに終わったことか？確かに、だがあの状況は俺たちが現着するまでにほぼカタがついていたはずだ…

「別にそんな険しい顔をするな。お前と千束のステップアップと言ったところだ。いつまでも二人でやるわけにもいかん。千束はリコリスだ。今のお前じゃあ立場が違う。3年前に9029を降りたお前とはな。もちろんバディを解消するからと言って別に千束と仕事をしないわけじゃない」

「どうやら俺のが100%仕事でミスをしたということではないらしい。

「アイツには新人を任せる」

「新人？」

「ああ、こいつだ」

先生から資料を渡される。

そこには先日機関砲をぶつ放したセカンドリコリスの写真が映っていた。

目線を下に、まとめられた資料に目を通す。

「命令無視、単独行動……」

「お前にそっくりだな。いうこと聞かず。単独で動こうとする。まあお前に関しては育て上げたヤツの責任でもあるが……アイツ、向こう側で笑ってやがるんだろな」

ぐうの音も出ないとはこういうことか……

師匠から一人で戦い生き抜くことを専門に教え込まれてきたチームワークというのを全く知らなかったというのもあるが……

コイツも仲間や信頼できる人間を知らない口か……

「お前と千束のような関係よりも女同士つてのがいい時もある。お前にもソイツの面倒を見てもらうことになる。まあお前も部下の育成つてヤツを経験するべきだな。ヤツを見てお前に足りないものに気付ける場合もある」

そういう見方もある……か……

「わかった……」

「それに……………」

もう一束資料が渡される。

「これは？」

「JBからだ……………アイツはどつかに盗聴器でも仕掛けてんじゃないのか？ヒイロを条件付きとはいえバディ解消でフリーにした瞬間こんな資料送りつけやがって……………それでな
どうやらクシユリナーダが動いてるそうだな」

パラパラと資料に目を通す。

Project ZEROの再開の可能性。

新薬 e p y o n の存在。

「楠からの情報によればリコリスが数名行方不明になっている……………断定はできないがコイツの仕業か……………」

「狙いは俺か？俺へのメッセージか……………」

「だろ？安い挑発だ。乗るなよ？」

「仕掛けてくるのであれば潰すまで……………」

一通り読み終えた資料を握りつぶしマッチで燃やす。

ナンバーズが来るのであれば当然 e p y o n を使ってくる。

「ZEROが必要になるかもしれない……………」

「2年使つてないんだろ？大丈夫なのか？」

「問題ない、おそらく2年程度では症状が緩和する程度だ。先生」

先生がため息をつく理由もわかる。

「心配しないでくれ、今度はちゃんと話す。千束にも……アイツも師匠の……シエスタの事をもう知らないわけじゃない……」

師匠の件についてはそこそこ踏ん切りはついているはずだ……

ジュリアとも千束とも命日には墓参りもしている。

「ならいいが……」

「調べるくらいなら俺一人でもできる。資料によればこの国にも小さな拠点を作りつつあるようだしな……」

「わかった……あまり無理はするな」

「了解した……千束にはもう？」

「いや？お前の方が納得した方が早そうだったからな」

まあ、確かに……千束は誰とでも上手くやれる。俺の方が問題か……

「さてとそろそろ起きろ、ミズキ」

先生と俺の傍には泥酔と書かれた瓶を抱きしめ眠りこける中原ミズキの姿がいた。

「なあにいくそう！千束にフラれた？アハハハ！じゃあヒイロはミズキお姉さんが貰っ

てあげる！黙って口閉じてればいい男よね。背は低いけど……まあ平均はあるし」

俺は、俺はフラれていない……

というよりこの女、最初から聞いていたな。

「寝言は寝て言え」

「ハアっ？何？行き遅れッ？よくも言ったわね？悪いのはこの口か？」

何故そうなる☒一言もそんなことは言っていない……

「先生、しばらく……」

「ああ……」

先生もドン引きしている事なので首筋に一撃。

中原はパタンと倒れる。

「千束が買い出しから戻るのが遅いな。迎えに行ってきたらどうだ？」

先生の氣遣いだろう。甘えさせてもらう。

「了解」

店を出ていつも仕入れる商店街の方へ足を運ぶ。

しばらく歩くとそこには赤い和服を着た彼女がいた。

彼女はスマートフォンを見ているようでこちらに気づいていないようだ。

「持つぞ」

「えっ☒うわっ！ヒイロ☒」

うわとはなんだうわとは……

「注意散漫になつてゐるな……」

「まあねえ〜それよりもきー！それよりもきー！見てよコレ！コレ！コレ！」

千束は俺の顔にスマートフォンを押しつける。

近すぎて見えないがどうやら「食べモグ」のレビューページのようだった。

どうやらホールスタツフのことが褒められているようだ。

「これ私だよねー！私だよねー！ウハッ、私ってそんなに綺麗かな」

彼女は髪をかき揚げ横から覗き込むように微笑む。その微笑みは反則である。

「そうだな……お前のことだろう」

「だよね〜だよね〜」

スマートフォンを持ちながらくると回ると回る。

なかなかな量を買ひ込んだな……

そうこうしているうちに店に着く。

「千束帰還しましたー！」

「戻りました先生」

店に着くと資料にあったセカンドリコリスの姿があつた。

井ノ上たきな

「本日からコチラに配属になりました！井ノ上たきなです！よろしくお願いします」

「おおく新人のリコリスうー、あ！私は錦木千束！こっちのムスつとしてののが風見緋色っ！よろしくうー！」

「千束さん！よろしくお願いします！あなたのお噂は予々d aでも聞かされています」
礼儀正しいのか硬いのか…

千束も同じ感想を抱いたのか、すかさず井ノ上の肩を組む。

「たきななかあ〜幾つ？」

「16歳です」

「じゃあ私が一つおねえさん〜」

スキンシップを眺めていれば先生が奥からやってくる。

「千束にはたきなとバディを組んでもらう。今日から相棒だ仲良くしろよ」

「え？」

その疑問は千束、たきなどどちらが発したのだろうかすぐにわかる。

「ちよ、ちよつちよつと待つてよ！先生！じゃあヒイロは？私とヒイロのバディじゃないの？」

「バディ交代だ。今日からお前のバディは俺ではなく井ノ上だ」

「え？ヒイロはそれでいいの☒」

キヨロキヨロと先生、井ノ上、俺と見ながら食い下がる千束。

そこまで食い下がってくれば俺も満足だよ。

これはお互いのキャリアアップのためだ：

だから

「任務だからな。それにお前と任務をやらないわけじゃないから安心しろ」

「はい…」

「なににー？千束ちゃんもヒイロくんが恋しいんですかー？」

「あ？黙ってる酔っ払い。オメエはさっさと旦那候補探せ」

中原撃沈。

口から何か見えたが言わないことにしよう。

「まあなににせよ…チームでやるわけだから千束もヒイロもたきなも文句はないな」

先生が締めることによりこの場は解散となる。

まあバディ関係の問題で多少あったが千束と井ノ上の関係は良好そうだ。

俺は着替えるために更衣室へ上がろうとすると声をかけられる。

「あ、あの！」

「なんだ？井ノ上」

「い、いえ……」

「お前の大体の成績と最近の任務に関しては資料を目に通してある。アイツから学べ……いい機会だ」

柄にもないが……彼女の成長を願い言葉をかける。

射撃能力も申し分なしあとは状況判断力と倫理観が課題か……

「アイツと同じ言葉だが、歓迎する。これからよろしく頼む」

「はい……よろしくお願ひします！」

こうしてリコリス二人と元9029兼実験体の物語が始まる。

「あ、それヒイロが淹れたの？私も飲む！たきなも飲む！意外に美味くなったんだよね。先生には劣るけど……」

ドタドタとカウンターに座り二人でコーヒーを飲む

「美味しい……」

井ノ上の感想に密かにガッツポーズを覚えたのはここだけの話とする。

穏やかな日に（前触れ）

「千束、挽きたての豆だ。絞田のところに寄るんだろ？これを持っていけ」
「ん、あんがと。たまにはおじちゃんに顔出しに行けばー？」

紙袋に入ったコーヒー豆を千束に手渡しながら話題に出た絞田組を思い浮かべる。
思えばシエスタに恩があつて俺にも関わりができたわけだが……

「騒がしいのは苦手だ……」

「あー」

「お前がその豆渡すだけでいいだろう……」

「よろしく言っておくよ」

「頼む。それに井ノ上に今日は業務レクチャーをするんだらう？」

「こそ、今日はたきなにリコリコの通常業務を教えないとねー」

ガサゴソとバックバックに荷物を詰めていく。

「それにしても……今回のたきなの異動の辞令……黙ってろ」……うん。でも、たきなは知るべきなんじゃない？」

千束が言いかけた事、それは良くない事だ。

「それは知らん。俺の管轄外……と言いたいが……お前と俺の予想が大体合っているのなら……」

「なら？」

千束のバツクバツクに手をかけた手が止まる。

「井ノ上には言わない方がいい。俺たちからはな……井ノ上が自分で調べて選択するべきだろう……あの時のアイツにミスはなかった。あの場での最善だ。おそらく本部だな……」

「まあヒイロは似たようなところいたもんね……わかるか……」

あとはあの女が仕組んだな……

バツクバツクを背負い立ち上がる千束を見送る。

ドアが開き外では井ノ上が待っているのが見えた。

「んじやあ！ヒイロ！行ってくるね！」

「ああ……」

いつも彼女と俺のやりとりはこんなものだ。ただそれが続くようにする。それが俺の今のやるべき使命。

千束とたきなが外回りに出てしばらく。

リコリコに一通の架電がはいる。

電話を取ったのはミカだ。

『楠木です。セカンドのリコリスの受け入れ感謝します』

「いや、コチラも人手が増えて助かる」

『さっそくですが……先日の方の件で……』

俺は聞き耳を立てる。

電話越しでもある程度は聞き取れる。

先生とおそらくdaの長官との会話……

「なに？1000丁だと？奴ら戦争を始める気か？」

先生が驚く。

確かにそんな量の銃が用意されればどんなバカでも戦争でも起こす気でもあるのかと錯覚するだろう。

『いえ、初めからフェイクの可能性があつたと……』

「フェイク？売人もあの場にいたろ？DAは尋問の一つや二つできなくなったのか？」

『いえ、あの機銃斉射で証人は全員死亡しております。』

その先を調べるのに一度千束とそのバディをお借りしたい……」

「いまの千束のバディはたきなだが……」

『おや？彼が千束との関係を解消したんですか？』

「まあ、そういうことだ」

『そうですか？意外ですね。それに千束と彼でDAの切り札となっていたのですから……彼だけでも……とは言えませんか？彼女があこの世から化けて出てきそうですから……面倒事はごめんですからね……ハア……わかりました。一応コチラで対処できるところまでは……必要とあればそちらの戦力をお借りします』

「わかった……」

『また連絡します』

先生が受話器を置きこちらに振り返る。

「聞いていただろ」

「ああ、だが俺は情報を集めるより……」

手元の銃を握りしめる。

「こちらの方がいい……」

「それもそうか……」

一方その頃

「そうか……ヒー坊は今日もこんかあ……」

顎を撫でる老人、後ろには黒いスーツの男たちが控えている。

向き合うは千束、たきな。

両者とも黒いソフアアに深々と座る。

「坊ちゃん……アレから笑うようになりやした？千束の姐さん」

側近と思われる黒服に千束が挨拶がてら答える。

「んー？まあーそこそこかなあ……あ、ハイこれヒイロから上物だつてさ」

紙袋を千束は老爺に渡す。

「悪いいな千束。いつもいつも」

「いいのいいの～お得意さんだしね～」

老爺は袋の中身を開けて香りを嗅ぐ。

「ほお～これは上物だ」

老爺の様子を見たときなが背中中のバックバックから拳銃を抜きかけるが千束にノー

ルックで抑えられる。

「イエメンのだって。挽きたてだってさ！」

老爺の持つ紙袋の中身がコーヒーということがわかり中腰気味のたきなは再びソフアーに腰を下ろす。

「そうかい！そうかい！そんで、そちらは？」

「うちの新人のたきなさん！」

「よろしくウー！たきなさん！」

「それで？坊ちゃんはいっ！うちを継ぐんでしようか」

側近の一人が千束に迫る。

「え？あ、ちよいちよいちよい継ぐ？どうゆうこと？」

「そりゃあ、いつものごとくヒー坊がうちのカシラになるっていう話だよ。史恵…あーシエスタの仕業だよ…まあ組としてもヒー坊がカシラになるってんなら安心だし。ヒー坊の隣にはまあ千束が座るわけだから、そりゃあ行く末も安泰だわな。ほれこの手紙。ヒー坊と千束のことが書いてんだろ？」

えー何やってんのーと心の中でシエスタへの不満を溜め込む千束。

そして今までは冷やかして言われていた姐さん呼びもあながち間違いいではないのかと…手紙を読み察した。

その一方でたきなは緋色の身辺にヤクザ出身というステータスを勘違いしていた。

「まあ、ヒー坊にはまあ気が向いたら伝えてくや、千束」

アハハハと乾いた笑いで千束はごまかしながら席を立ち上がる。

「今日は見送りいいからね。たきなさんに業務教えてるから」

「そーかい。氣い付けてな」

「では、今後ともご鼻屑に〜」

外に出るとたきなが横で待っていた。

「あ、あの粉々ヤバい粉だと思ったでしょお〜？」

千束がたきなを煽る。

「撃ち殺しそうでした」

「冗談だつて!」

少し強めに千束はたきなの肩を叩く。

「そういえば、ヒイロさんつてヤクザの跡取りなんですかね? 反社組織と繋がりがあ

りますか……」

「え? あ、ちがうよ! アレはヒイロのお師匠さんの話!」

ムスツとしたたきなの肩を持ちながら公園に移動する。

「ヒイロさんのお師匠さん?」

千束はベンチに腰掛ける。

「ヒイロのお師匠さん、シエスタ・アオイさん」

「シエスタ…アオイ…」

「裏ではリコリスみたいなこととして表向きは探偵だったんだって…それでね絞田のおじちゃんと関わったんだってさ。その時に妙に気に入られちゃったらしくてね？ 兄妹の契りって奴？ 交わしたらしいのよ」

「それで、それがヒイロさんとなんの関係が？」

「うーん？ それがねー」

たきなの疑問に千束は口元に手を当てながら答える。

「シエスタさん自分に何かあった時全部ヒイロにくって」

「なるほど…」

「色々してくれてるんだよー？ リコリコにだってさ。喫茶店立てたのおじちゃん会社だし。ちっさい頃のヒイロを見てる部下の黒い人たちがヒイロをカシラ？ って奴にしなくてたまらないみたいだけどねー」

千束はほんと映画だよねーと付け足す。

「それd a知ってるんですか？」

「どうだろ？」

確かにと千束も思い浮かべる。まあ街の小さなヤクザの一つにd aが感知するとも思えないが……

「まあ、ヒイロさんも大変なんですね。わかりました。それともう一つ、あと千束姐さんってなんですか?」

「え?」

千束はヒイロのことを話していたらまさか自分に飛び火するとは思ってなかった。

「親分さんもずいぶん千束さんにも馴れ馴れしかったですし…姐さんって千束さんも…その、契りというのをを交わしてるんですか?」

「ち、契りい? いや、あの…その…ですね…」

契り…千束の中でさまざまな想像が繰り広げられる。

「それに家族じゃないのに姐さんって…なにか別のニュアンスでも?」
「いや、ちよい…まっ…」

みるみるうちに顔を赤らめる千束に無自覚に質問という名の死球をぶつけるたきな。そこに救いのアラームが鳴り響く。

千束は勢いよく立ち上がる。

「もうこんな時間だ! 警察署に行かないと! この話はまた今度ね!」

「ちよつと待ってください！まだ話は終わってません！」

千束は火照った顔を冷やすように走る。

後ろからは、たきなが静止するように叫びながら追いかけていくのであった。

千束とたきなを見守る影

「あの子ずいぶん大きくなつたのね…緋色の…大丈夫かなあ…うまくやれているだろうか…」

この言葉は誰にも聞こえず都会の人ごみの中にかき消されるのであった。

年上のひと（無関係

『もしもしもしもし〜？』

携帯に掛かってきた電話を取れば彼女の陽気な声が響く。

「今業務中なんだが……」

『わーってる！わーってるって！「じゃあ切るぞ」ちよいちよいちよいちよい！雑談とかじゃないよ！私も業務の方だって！』

スピーカー機能にしている状態でも耳から離れた距離まで聞こえる音量で彼女は静止する。

「それで？特に井ノ上とトラブルになったわけでもないんだろ？俺の出る幕じゃない」

『そーゆうことじゃねーし！あのね？ストーカーがいてね！その護衛をヒイロにお願いしたいなあ？って……』

「話が読めん……」

どうやら、警察からの小遣い稼ぎでストーカー被害の女性を護衛をすると言うのだが、どうやら表向き千束も井ノ上も女性、男性もそれも彼氏や警察とは関係なく腕の立

つ人間が一人必要だということらしい。

「それで？俺は何をすればいい？」

『それ、うーん……一旦合流で！』

「ハア……了解した……場所は後で送ってくれ」

『オツケー！待ってるー』

店につけば千束、井ノ上がテーブルの席で向かい合って座っていた。

「こちらに気づいた千束が手を振る。

「待ったか？」

「いいやーまだ依頼人が来てないからねーはい、メニュー」

「了解した」

席に着くと同時に差し出されたメニューを受け取る。

無難にコーヒーカー……というより千束から熱い目線を感じる。

なんだその目は……キラキラさせるな……全く……ハア……

「これか？」

指差した先にはかなりの大きさのパフェの写真が……

「千束さん？その摂取カロリーは……」

「いいのいいの！そのためにヒイロ呼んだんだから」

趣旨が違うような気もするが…

最近は大ブレット式というのが流行っているのか…と考えながらメニューの番号を入力していく。

「それで？井ノ上…この仕事については大体レクチャーを受けたようだが？」

「はい…ですが、ここではd aからの評価というのは得られるのでしょうか？」

評価……ねえ……

「なぜ？」

「千束さんが言う人助け…確かに素晴らしいことだと思えます。しかし我々リコリスとしての本分とはかけ離れていると思います。これではd aに戻ることができない…」

なるほどなあ……

「d aに戻るか……」

千束の方に目をやる。先に頼まれて運ばれてきたコーヒーへ視線を落としている。思うところは俺にもあるが千束も同じリコリスだ。任せるか…

「そうか…戻りたいのかあ…」

「はい！千束さん、わたしへの今回の人事は正当なものとは思えません」

「正当、か……じゃあさ、たきなはなんであの時撃つたの？命令なかったんでしょ？」

「え？」

千束の言葉に井ノ上は若干の動揺を見せる。

確かにDAのアルファにいるならばチームでの行動だ。命令無視、スタンドプレーは御法度だな。

まあ、俺や千束のようにスタンドプレーから成り立つチームワークというものもあるが……それはお互いに次の手がわかつているから成り立つものであつて他チームで成り立つものではない……

「別に責めているわけじゃないよ……でもさ、命令無視つてことは揉める要因の一つだよ。異動する理由に十分なる。それがわかつてなんで揉める選択をしたの？」

「合理的であるからです。」

合理的ね……井ノ上の耳が尖り耳で論理論理と言っているのであれば納得だ。

「しかし、結果は……」

「はい、結局あんな騒動になってしまった……」

「あんな騒動……か……」

「たきなが思つてる騒動になつてないと思うけどね私」

「え？」

千束は口につけたコーヒーカーップおき背もたれにもたれかかる。

「だって、普段のそう言う事件は組織が全部揉み消してしまう。事件は事故、悲劇は誰かが頑張って何かを失った結果の美談なんかになる。今回のは表向きには建物の建設時の手抜き……なんかになってるんじゃない？」

「じゃあ……」

俺たち3人は店の窓から見える、かつてスカイツリー……と呼ばれていたものを眺める。

「最後の大事件も今や平和なシンボル」

最大の皮肉だな。と千束の言葉に付け足す。

「でしたら……私は何をしたんでしようか？」

斜めに傾いた電波塔から目を離さず井ノ上は俺たち2人に投げかける。

「仲間を救った！それでいいじゃん？かつこいいよ！たきなは！」

そうだ……彼女は仲間のために動いた。その事実は消してなくなるならない。

「わかった！私とヒイロ！2人でたきなのDA復帰に協力するよ！ね？ヒイロ？いいでしょう？」

仕方ないと目を瞑るとそれが了承の合図とわかったのか腕を振り上げ喜ぶ千束。

「店中だ……静かにしておけ……」

「うぐう……あ、ヒイロきたよきたよ！」

手を振る千束の目線の先には1人の女性がキョロキョロと見回しコチラを見つけると不安そうな顔は少し緩んでいたのがわかった。

篠原沙保里

どうやらカップルでのデートの途中記念写真のつもりがちよつと『ヤバイ』風景まで映り込んでしまったようだ。

s n sにまで攻撃が来ているようだ。

井ノ上からアップロードした写真を見せられ千束と2人で確認すれば千束は肘で脇腹を小突く。

確かに先日の銃取引の現場だろう。時間は……………

携帯を手に取り確認すると撮影日時が俺たちがくる3時間ほど前ということがわかった。

つまり銃の取引は行われていたが時間がf a k eであったと言うわけか……………

「これかなり不味くない?」

「ああ……」

小声で千束が事態の危険さを理解しコチラに伝えてくる。

井ノ上もアイコンタクトで同意見ということがわかった。

程度の悪い歪んだ性癖の持ち主が犯人かと思つたが…もつとタチの悪いものに付き纏われていたとはな……

「とりあえず千束はそのまま彼女には伝えず話を進めろ」

「オツケー！」

とりあえず恨みを買うような人物は身边にはいないようだ。利用されるとすれば彼氏の方……か……

「篠原さんではなく彼氏の前の交際相手……という可能性は？彼氏もストーキングされている……ならそう言う線もあります。本当に写真をアップロードしてからストーキングが始まりました？」

「ええ……お互いに前の交際相手はいないのに……写真を上げる前はこんなこともなかったの……」

「そうですか……篠原さん。なるべく1人になる時間を減らしてください。今日はウチの井ノ上、錦木と過ごすといひと思ひます。そうですね……女子会……つてのもどうでしょう？」

「え？ヒイロは？」

バカかこの自分最優先主義者が……

「千束さんヒイロさんは男性です。一応の配慮だと思えますが……」

ジト目で井ノ上は千束を見る。

そんな井ノ上から視線を逸らす千束。

「まあ、買い物くらいなら付き合いますよ。夕方はシフトが抜けられると思いますので……」

時計を見れば日もそろそろ暮れそうな時間帯。

もし動くとすればこれからの時間帯だ。

「明るいウチに行動し始めましょう」

「はいはい！ 私お泊まりセット持ってくる！じゃあしばらくよろしくね！」

全く……コイツは……

「じゃあ篠原さん。ソラマチに行きましょう。いろいろ揃うと思うので」

「ええ、そうね」

「それじゃあ篠原さん！また後でねー！」

アイツは本当に元気が有り余っているようだ。

井ノ上はコチラに残るようだし3人で食材買い出しだな。

篠原さんの会話は井ノ上に任せ俺は一步引いたところについていく。

喫茶店にいる時から三周くらい近辺を回っているバンに注意を払いながら……

一通り買い揃え終わり篠原さんの自宅へ向かう。

『ヒイロ？もうすぐ合流するけど異常は？』

千束だ。おそらく仕掛けてくることを想定してインカムをつけているのだろう。

「挟まれてる」

『え、マジ？』

後ろからつけているバンと前を走るバン。前を走るバンはかなり距離が離れているが喫茶店を出る際同じような作業服の人間が乗り込むのと我々が動くのと同時に動き出したので、おそらく奴らだろう。

「早く来い、俺は前の方をやる」

『弾は☒』

「問題ない。非殺傷弾だ」

『よかった…じゃあ前はよろしく』

「了解した」

井ノ上は篠原さんの横についている為すぐさま俺は壁をよじのぼり一軒家屋根を

伝って前のバンに迫る。

俺は徐行したバンに簡単に追いつく。

タイミングを測りバンの屋根に飛び移る。

そのまま運転席に一撃。

フロントガラスは強化ではなかったようで1発で貫通し運転手の眉間に炸裂する。

「二」

運転手が気絶しアクセルから足が離れたことにより車は急停止する。

車が徐行とはいえずスピードが出てる状態から停止した勢いの慣性を利用し屋根から飛び降りる。

銃を構えてバンの正面に躍り出る。

ここまで仕事をしていれば自身が撃つ銃弾が有効的に使えるラインというのが自然と見えるようになる。

両足に2発：

バンのドアから出てきたところを2発撃ち込む。

痛みで男は屈み頭部を晒した瞬間に回し蹴りで気絶させる。

「2」

奥の先から銃を向ける。

ワン、ツー

首を傾け足捌きで体を逸らし弾を避ける。

所詮千束の真似事だ：以前はZEROがなければできなかつたが：今の俺ならでき
る。

アイツのストレスで避けるというのは本当に当たらないとわかつてなければできな
い芸当であり。それでいて当たるかもしれないというスリルもある。

俺は高揚していた。

銃口は奥の席の相手の眉間に向けられる。

背後からの殺気：いや、奇襲という結果に対応し、もう片方の得物を抜く。

2発の銃声と倒れる音

「これで4つ」

「クソガキ！ゲームやってんじやねえんだぞ!!？」

「かもな…」

ゲームか、確かに楽しんでいる。いや楽しまなければ呑まれるのだ。

この殺し合いの中でずっと俺の中のナニカが奴を殺せ。危険だ。というサイレンを
ずっと鳴らし続けている。

殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺

せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ

「殺すかよー！」

喧しいサイレンから気を逸らすための楽しみ。

殺す方が楽…

確かに、楽であるがその衝動に身を預けてしまうほどまだ自分は壊れていない。「お前たちの命にこれっぽっちも興味なんてないんだよ。今ここで殺しても……」

奴の瞳に反射する俺はなんだったのだろうか？

命を終わらせる悪魔か？それともあの世へ誘う天使か？

どちらにせよ。目の前で泡を吹き意識を失うこの男に対して俺は人間よりも異常な存在に視えたのだらう。

「まだ残存する敵がいる」

微かな物音から車体から降り身を潜めているのがわかる。

ガタガタと震える脚。両手で伸ばしきった腕の先に構える拳銃。

「銃を置け」

最低限の警告だ。

震えながら最後の男はコチラから目を離すことなく静かに銃を置き手を頭の後ろに

置く。

男をワイヤーガンで絡めとる。これでクリーナーが来るまでは身動きが取れないだろう。

メールにてクリーナーに現在位置を送信し、井ノ上と篠原さんの救援に向かう。

問題はなさそうだが……

2人の元へ戻れば千束のが到着しあらかたカタがついていた。

「あ、ヒイロ！おつかれー！」

俺はは千束へ銃口を向ける。

「へ？」

勿論避けるのは承知済みだ。

千束も目つきが変わりそのまま俺が放った銃弾を避ける。

千束の後ろで呻き声を上げバタリと仰向けに倒れる男。

「もー！びつくりすんじゃんかよー！」

「お前ならわかると思ってた」

俺たちのやりとりに井ノ上が驚いた目をしたコチラを見ている。

「千束さんが避けるのをわかっていたんですか☒」

「ああ…何年やってると思ってる」

この件に関して千束は何も言わない。ただ口角が少し上がっているのは確認できた。

「井ノ上、お前は結果だけ見過ぎだ。過程もこの部署では重要視される。覚えておけ」
先の行動から篠原を囮に使った事を言っていると理解してくれればいい。

まだDAから来たばかりならそんなものだろう。

「ヒイロさんは！ヒイロも、非殺傷弾を使うんですか？」

「ああ、アイツとの約束だからな…だが、必要なら俺は殺す。俺から言えるのはそれくらいだ」

まだ何かいいだけな感じではあるが来たばかりの井ノ上に話したところで理解はしないだろう。

「ヒイロ…調子は？使ったの…？？」

ZEROのことだろう。もちろんこんな奴らに使うわけがない。

「いや？コイツらは素人だ。スペシャリストの俺がこんな奴らに使うわけないだろ」

「……………プツ…なにそれ…スペシャリスト…フフフ」

千束が吹き出す。

「…漫画の受け売りだ。お前が読めといったんだろ？」

「それはそれは〜」

「井ノ上とやれそうか？」

「ボチボチね」

「そうか、別に俺がいなくなるわけじゃない…今日みたいな闘い方もある。チーム……だからな……」

「なあに？ヒイロ？似合わなすぎ…」

「ああ、自分で言っていて自分で殺したいと思った」

相変わらず俺から発せられる声は無機質な感じだ。

感情のままに行動する。

だが、まだ表へにはなかなか出ないのか……

「さて、戻るか」

「あ、私お腹すいた！」

「作ってやるから待ってろ」

「はいはい、あ！篠原さんとたきなの分もね！」

「了解した」

まあこれで彼女は襲われることはないだろう。

篠原さんの怪我もなくこれで一件落着ということになる……

後日聞いたが、あの事件の一部始終を除いていた奴がいるそうだと。ストーリーカー被害もアレからないそうだと。

『たきながリコリコの制服着ましたー！記念撮影するからヒロもきてー！』
千束からの呼び出しか……

さて、行くか………

ガチャとドアを開ける店内の客席へ向かうのだった……